

1. 関係概念としての「子供」

子供というのは一種の関係概念である。関係概念とは、男性と女性、父親と母親、先生と生徒などのように、対応する別な概念と対になっていて、それとの関係で成り立つ概念のことである。子供の対概念は、一つは大人であり、もう一つは親である。他の動物の場合、大人に対する子供と親に対する子供の有りようはほぼ重なるものであるが、人間の場合はそうではない。

Ph・アリエスの『〈子供〉の誕生』によれば、ヨーロッパ中世及び近世初頭においては、子供は必ずしも自明な存在ではなかった。当時、子供は7歳になると「小さな大人」として見なされていた。こうした子供観は日本にもあった。子供から大人になる過程では、元服などの通過儀礼があった。これは、伝統的文化の持つ知恵でもあるように思う。

文化が崩れ、国情が不安定な時は、子供たちが大人たちに都合のよいように扱われる。開発途上国などの武力紛争で見られる少年兵の存在が、その最悪なケースである。我が国ではそういうことはないが、子供に対する虐待は非常に増えている。我が子を虐待する親は、親とはいいながらも精神的に成熟した大人になっていない。ここに、親であっても大人になりきれないという問題がある。

2. 流動する年齢区分 ― 一般社会と天理教の場合

子供から大人になるまでの間に、子供でも大人でもない過渡期として、青年期が登場してきたのは近代社会になってからである。さらに今日では、「人生七掛け説」とか、「30歳成人説」という考え方も出ている。現代日本の法律では、子供は児童福祉法における児童（満18歳未満）、少年法における少年（満20歳未満）など、法の目的によって何歳かという位置づけが異なっている。

天理教の場合、少年会では、植物の成長になぞらえ、少年会員の区別がめげえ、ふたば、あおば、わかぎという形で行われている。わかぎは中学校1年～3年であり、中学3年は15歳前後だから、子供時代は中学卒業までということになり、15歳という年齢が一つの線引きとなっている。これは「おさしづ」に「小人々々は十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めんへの心通りや」（21.8.30）などと教えられているところと関連があるだろう。ただ、「おさしづ」時代の15歳と現在の15歳は精神年齢が違うので、お道の話聞いて本当に分かり、「皆めんへの心通り」になるのには、もう少し年限が必要になる。現在、別席受講、修養科入学の可能年齢が満17歳以上となっているのも、そのような理由からではなかろうか。

3. 子供の人間学

子供とは必ずしも人間が大人になる前の段階ばかりではない。大人になった後で迎える子供の境地もまた存在する。ニーチェは、人間の精神の最後の段階が、何でも受け入れそれを楽しんで通る「幼子の時期」だと述べた。そのような意味で、子供とはまた、人生の到達すべき一境地でもあると位置づけることができる。

天理教には「三才心」という言葉がある。三才心の人にとっては、毎日の暮らしが《陽気遊び》である。しかし、そうした自由闊達な境地は、人生の諸困難を克服していく中で得られる境地にはほかならない。

青少年期の心理学で「反抗期」ということが言われる。反抗期こそ、子供が親から精神的に自立するために不可欠な時期である。これが無いと、親離れ・子離れもできない。心理学や精神分析理論では、象徴としての「親殺し」が語られてきた。これは、心のなかの親への依存感情、また親からコントロールされているという意識を克服することであり、それは自我の確立・精神的自立のための不可欠なプロセスである。

人間同士の間不健全な親子関係を克服し、お互いに成熟した大人と大人の関係になることによって、真に天理教的な意味での親子関係が構築できる。すなわち、人間は親なる神との垂直軸での親子関係のもとで、水平軸において人類全体をカバーする兄弟姉妹の関係を築くことである。これは、家族の輪が世界中で無限大に広がった姿、つまり親神を唯一の「をや」と仰ぎ、人々が丸い葡萄の房のようにつながりあった陽気ぐらし世界のビジョンでもある。

4. やり直しがきく「復活力」こそ「子供」の特性

人間の精神や心には可塑性がある。実のところ、私たち人間は皆だれもが、親神の眼差しから見れば子供であり、意識のある最後の最後まで心の入れ替え、やり直しを通じて心の成人を果たしていく存在である。要するに、私たち人間は、挫折と失敗を重ねながら、陽気ぐらしというゴールを目指し、成人の道を歩む永遠の子供なのである。

心の入れ替えは、自分自身に対しては「いんねんの切り替え」になり、社会に対しては「世の立て替え」にもつながる。心の転換が社会の変革の原動力となるのである。そこには、現実主義に対する理想主義の勝利の確信がある。シュヴァイツァーは、「理想は純化した人間の本質とむすびついたときに、はじめて力を発揮する」と、自らの少年時代を振り返って語り、「もしも私たちが14歳当時の人間になるならば、世の中はまったく面目を一新してしまうだろう」とも述べた。そして彼自身、そうした14歳の理想主義を大人になっても生涯持ち続け、アフリカで黒人への医療奉仕のために後半生をささげたのである。

5. 子供たちを生き生きと

現在、子供たちを取り巻く社会状況はきわめて困難なものがある。そこに格差社会、貧困社会というものが暗い影を落としているのは確かである。厚生労働省によれば、貧困状態にある子供（ここでは17歳以下）の割合を示した「子供の貧困率」は、平成24年の時点の推計で16.3%、子供の6人に1人に上っている。そうした中で虐待なども起こっている。

子供時代は人生で最も楽しい時期であるべきだ。子供たちの居場所や逃げ場所は世の中にどのくらいあるのだろうか。町のあちこちで「子ども110番の家」と書かれた黄色い旗を掲げた家を見かけるが、これは子供を犯罪被害から守るための地域の防犯拠点を意味している。天理教の教会や布教所、また一般の信者宅が率先してそれを行うそれならば、これらが子供たちの逃げ場所や居場所になりうるだろう。実際に教会を開放し、子供たちが自由に出入りして、彼らの居場所作りを進めたりしているところもある。

血縁や地縁が機能しなくなり、無縁社会と呼ばれる現代日本において、天理教の教会がそうした居場所になるならば、子供たちにとってこんな心強いこともないのではないか。